

熊本から世界を目指す産業遺産

～身近な産業遺産が生み出す新たなストーリー～

はじめに

平成19年に鳥根県の石見銀山がアジア初の産業遺産として世界遺産に登録され、注目を集めたことは記憶に新しい。熊本県内においても江戸、明治時代に作られ現在も利用されている橋、用水路等の身近な土木施設や、旧万田坑、三角西港をはじめとする多くの産業遺産がある。そこで、今回は熊本県内の産業遺産の中から世界遺産への登録に名乗りを挙げ、かつ幕末ないし明治以降の産業化、近代化に関係した資産に注目して、地域活性化の可能性を探った。

1. 世界遺産について

～熊本県内では4件の文化資産の世界遺産登録を目指した取り組みが進められている～

世界遺産とは、「世界の文化遺産及び自然の保護に関する条約」（世界遺産条約）に基づき、国連教育科学文化機関（ユネスコ）の「世界遺産一覧表」に登録され、顕著で普遍的な価値をもつ人類共通の資産のことを指す。また、世界遺産は、「文化遺産」、「自然遺産」、文化と自然の両方の要件を満たしている「複合遺産」に分類され、平成24年6月現在で936件が登録されている。国内の世界遺産は、下図表1のとおり16件あり、内訳は文化遺産が12件、自然遺産が4件となっている。

熊本県内では、まだ世界遺産に登録された資産

はないものの、関係資産は4件あり、いずれも文化遺産としての登録を目指している。

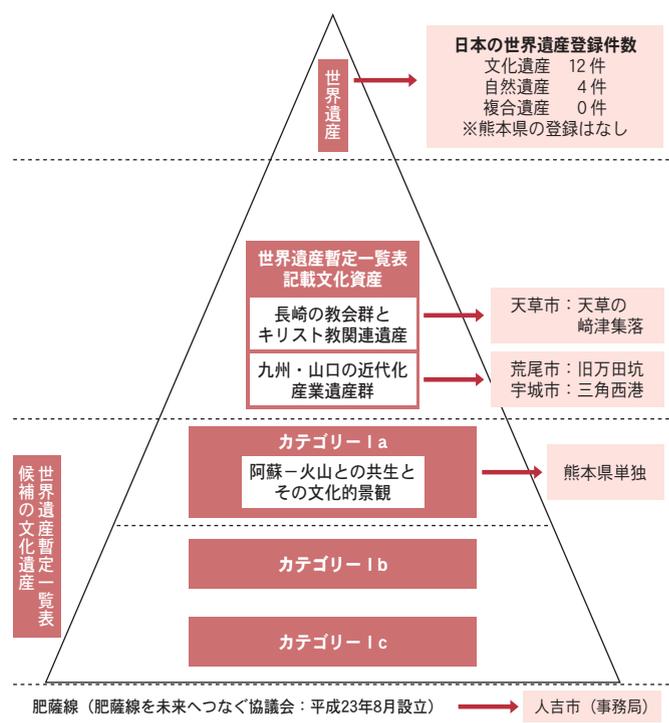
その内訳をみると、まず国が将来世界遺産に登録する計画がある物件としてユネスコに提出する世界遺産暫定一覧表（暫定リスト）の中には、県内から2件がリスト入りしている。世界遺産に登録されるためには、この暫定リストに記載される必要があり、「長崎の教会群とキリスト教関連遺産」を構成する天草の崎津集落と、産業遺産である「九州・山口の近代化産業遺産群」の構成資産として荒尾市の旧万田坑施設と三角西港がある。

図表1 日本の世界遺産(文化遺産12件、自然遺産4件)

	記載資産名	所在地	区分
1	法隆寺地域の仏教建造物	奈良県	文化
2	姫路城	兵庫県	文化
3	屋久島	鹿児島県	自然
4	白神山地	青森県、秋田県	自然
5	古都京都の文化財 (京都市、宇治市、大津市)	京都府、滋賀県	文化
6	白川郷・五箇山の合掌造り集落	岐阜県、富山県	文化
7	原爆ドーム	広島県	文化
8	厳島神社	広島県	文化
9	古都奈良の文化財	奈良県	文化
10	日光の社寺	栃木県	文化
11	琉球王国のグスク及び関連遺産群	沖縄県	文化
12	紀伊山地の霊場と参詣道	三重県、奈良県、和歌山県	文化
13	知床	北海道	自然
14	石見銀山遺跡とその文化的景観	島根県	文化
15	小笠原諸島	東京都	自然
16	平泉 一仏国土(浄土)を表す建築・庭園及び考古学的遺跡群一	岩手県	文化

資料：図表1、2 各種資料より当研究所作成
備考：図表1の記載順は世界遺産一覧表記載年月順

図表2 熊本県内の世界遺産の登録推進状況



また、熊本県が阿蘇郡市とともに登録を推進している「阿蘇」は、暫定リスト入りへの候補となる「カテゴリーⅠa」に位置している（図表2）。これらの3つの資産に加えて、平成23年8月に人

吉市が中心となり、宮崎県、鹿児島県の沿線自治体と県境をまたいで協議会を設立した「肥薩線（八代―隼人）」が世界遺産登録に向けたスタートラインに立っている。

2. 九州・山口の近代化産業遺産群

～西洋以外で初めて、かつ極めて短期間のうちに飛躍的な発展を遂げたわが国の近代化の原動力～

(1) 全体像

日本の近代化は、幕末における西洋技術の導入以来、西洋以外で初めてかつ極めて短期間のうちに飛躍的な発展を遂げたことから、世界史的にみて特筆される価値を有する。

その原動力となった「九州・山口の近代化産業遺産群」（以下、九州・山口の遺産群）は、産業近代化へのプロセスを証明する様々な資産群（基幹産業である製鉄・造船・石炭など）から構成されており、構成資産候補は8エリア、全体で28資産となっている。複数の資産を共通のテーマでつなげる方式「シリアル・ノミネーション」を採用しており、八幡製鐵所（北九州市）や旧集成館（鹿児島市）など九州・山口地域の資産のみならず、葦山反射炉（静岡県伊豆の国市）や橋野高炉跡及び関連施設（岩手県釜石市）が入り、構成資産の分布が広範囲に及ぶ特徴がある。

熊本県内資産は、旧万田坑施設と三角旧港（三角西港）施設の2資産であるが、次項では旧万田坑に着目してみていく。

(2) 三井三池炭鉱旧万田坑施設（荒尾市）

① 概要

三井三池炭鉱は、明治・大正・昭和を通じ日本の近代化の牽引役を担い、各種産業の勃興・発展を促した炭鉱で、万田坑は明治35年から出炭を開始した。同坑は、当時の最先端の技術導入がなされ、明治・大正期における最大級の炭鉱施設であった。昭和26年に採炭効率が低下したことから、採炭を終了し、有明海にまで及んでいた坑道の排水等のメンテナンスのための施設となり、平成9年の閉山により、第二豎坑の坑口を閉鎖し近代炭鉱の歴史に幕を下ろした。その後、平成10年に国指定重要文化財、平成12年に国指定史跡となり、二重の国指定となっている。

九州・山口の遺産群のストーリーの中で同坑は、①自力によって近代化を果たし、②積極的に技術導入を行い、③国内外の石炭需要にこたえ、④重工業へ転換を果たしていったという「4つの発展の過程」において、③の過程の重要な資産として位置づけられる。



三角旧港（西港）

三国港（福井県）、野蒜港（宮城県）とともに明治の三大築港事業として明治20年6月竣工のわが国初の近代港湾施設。明治の三大築港のうち、石積みの埠頭など築後100年以上経た今でも当時の姿をとどめるものは本港のみ。



第二豎坑櫓と巻揚機室

万田坑のシンボルで、明治41年に完成。隣接する巻揚機によりワイヤーが巻かれ、吊るされたケージ（昇降用エレベータ）が上下していた。豎坑の深さは264メートルもあったが、平成9年の閉山に伴い埋められている。

②世界遺産登録に向けた取組み

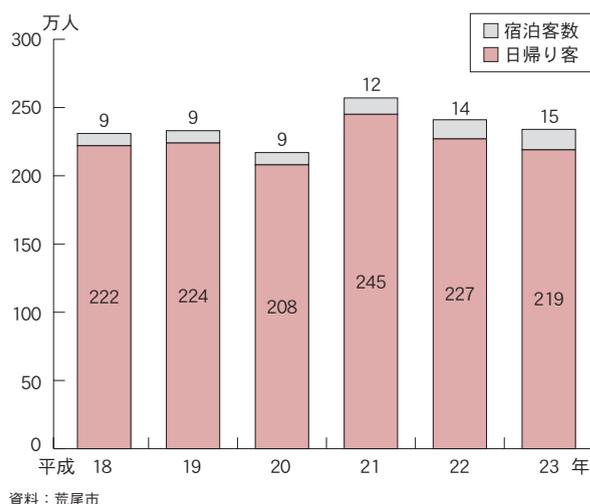
平成21年の世界遺産暫定リスト入り後の取組みをみると、荒尾市では九州・山口の遺産群として平成24年度中に登録に必要な準備を概ね完了させ、平成27年の世界遺産登録を目指しており、引き続き登録に向けた学術研究や保存管理計画の策定などを進めている。

ここで、観光面から世界遺産暫定リスト入りの荒尾市への影響をみてみたい。荒尾市の観光客数の推移を図表3でみると、世界遺産暫定リスト入りした平成21年は、高速道路料金の値下げなど他要因もあったが、視察などによる来訪者も増えたようであり前年比約2割増加の約256万人となった。平成22年は前年比で減少したものの、同市がインフォメーションセンターとして万田坑ステーションをオープンしたことから開業効果がみられ、万田坑への入場者数は50,190人に上った。

平成23年の万田坑への入場者数は22,782人と落ちついているが、第二壱坑槽などの建造物をスク

リーンに見立てて映像を映し出すデジタル掛け軸のイベント「万田坑D-K LIVE」の継続開催や、民間では万田坑とメガソーラー施設の見学を組み込んだ新旧エネルギーを切り口とした旅行の提案がなされるなど、世界遺産登録後を見据えて産業遺産の活用を図る官民の取組みが動き出している。

図表3 荒尾市の観光客の推移



3. 肥薩線

～世界遺産登録へのスタートラインに立つ肥薩線～

①概要

肥薩線（八代～隼人・鹿児島県霧島市）の明治42年の全線開業により北海道・釧路から鹿児島までの日本縦貫鉄道が全通し、日本の鉄道時代の幕が開いたとされる。肥薩線は、明治時代に建造された駅舎や橋梁、日本初のスイッチバック、ループ線構造の線路などの鉄道遺産が現役で利用されている。平成23年8月に人吉市、宮崎県えびの市、鹿児島県湧水町を中心に、沿線自治体の14市町村で「肥薩線を未来へつなぐ協議会」（事務局：人吉市）を設立し、肥薩線を世界遺産に登録しようというプロジェクトが始動した。

なお、鉄道の世界遺産は、①ゼメリング鉄道（オーストリア）、②ダーズリン・ヒマラヤ鉄道（インド）、③レーティッシュ鉄道（スイス～イタリア）の3件が登録されており、肥薩線は鉄道で4番目の世界遺産登録を目指す。



SL人吉が通過する第一球磨川橋梁

第一球磨川橋梁は、アメリカンブリッジ会社エッジムール工場製で、明治41年に架橋。経済産業省の近代化産業遺産の構成資産に選定。肥薩線に設置されている大小100を超える橋梁の代表的な存在。

② 暫定リスト入りを目指した取り組み

人吉市では、平成24年4月に肥薩線の文化遺産調査と地域振興を業務内容とした「肥薩線世界遺産推進室」を設置した。八代一隼人間にある駅舎、トンネル、橋梁などの鉄道遺産約350件を調査研究の対象とし、10年以内の世界遺産の暫定リスト入りを目指している。まずは、熊本県内の7駅舎（八代、坂本、白石、一勝地、渡、大畑、矢岳）と真幸駅舎（宮崎県えびの市）の8つの木造駅舎の文化財調査を進め、世界遺産登録に向けた機運を高めるきっかけとしたいとしている。

ただ、世界遺産に登録されるには、文化財保護法による「国内における万全の保護措置」が図られているとともに、該当資産が「顕著で普遍的な価値」があると認められる必要があり、いわゆる人類が共有すべきストーリー性が強く求められている。この点、肥薩線は日本国内では貴重な鉄道遺産であるものの、世界の鉄道史における位置づけは研究途上にあり、歴史的な価値を裏付ける作業がこれから続くそうである。現状では様々なストーリーが構想されているが、一例として鉄道技術が英国からドイツ、米国、そして日本に伝わり、肥薩線が西洋の技術を取り込んだ結晶であるのに対し、昨年開業した九州新幹線が日本の独自技術

の結晶として誕生したというストーリーを持たせることも考えられるなど、世界遺産登録に向けた夢が膨らむ。

今後は資料や研究成果などを展示する「鉄道ミュージアム」をJR人吉駅周辺に開設する構想も立ち上がっており、見学に訪れた観光客がそれぞれの近代化から現在に至るストーリーを組み立てる楽しみも生まれそうだ。



石造りの人吉機関区車庫

人吉機関区車庫は明治44年落成。庫内には、点検ピットや修繕設備などが当時のまま残存。全国唯一の現役の機関庫として、経済産業省の近代化産業遺産の構成資産に選定。

4. 世界遺産登録への課題

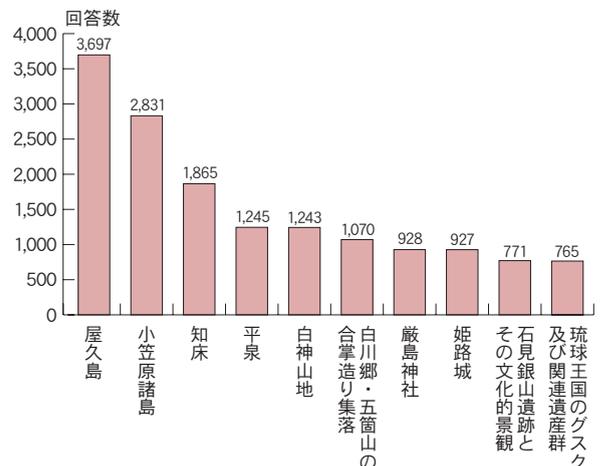
～乗り越えるべきハードルが多い産業遺産～

(1) 住民の意識醸成

産業遺産は、一般的に馴染みが薄く、観光客や地域住民の理解が深いとは言い難いようである。

JTBが平成23年9月に公表した「日本の世界遺産に関するアンケート調査」をみると、「今後、訪れてみたい世界遺産を教えてください」と尋ねた問いでは、1位「屋久島」、2位「小笠原諸島」、3位「知床」、5位「白神山地」となり、日本の世界遺産16件のうち自然遺産の4件すべてが、トップ5にランクインしている。一方で、産業遺産として登録されている「石見銀山遺跡とその文化的景観」が9位に入っているものの、観光の面

図表4 今後訪れてみたい世界遺産(上位10位)



資料：JTB「日本の世界遺産に関するアンケート調査」

からみた場合には、自然遺産のイメージのしやすさに比べ、産業遺産はわかりにくいことがうかがえる（図表4）。

また、世界遺産の登録に向け、地域住民の意識醸成や観光客への案内の充実が欠かせない。万田坑では地元の有志が「万田坑ファン倶楽部」を結成し、万田坑の歴史や資料の説明とともに施設内を案内しており、重厚な巻揚機などの存在感をさらに引きたてている。

同様に肥薩線でも、市民の活動が世界遺産の登録を後押しする。国鉄OBなどで構成される「人吉鉄道観光案内人会」は、人吉駅の機関庫の案内や子どもを対象にしたイベントなどの開催を通じて、肥薩線を地域に語り継ぐ活動を続けている。平成23年12月には、その活動が評価されて日本ユネスコ協会連盟の「プロジェクト未来遺産」に選定された。今回の選定により、同会は活動への資金面での援助やPRなどの支援を受けられるようになり、肥薩線の魅力を発信する機会の増加が期待されている。

（2）稼動資産の問題

世界遺産を目指すにあたっては、登録された地



万田坑ファン倶楽部

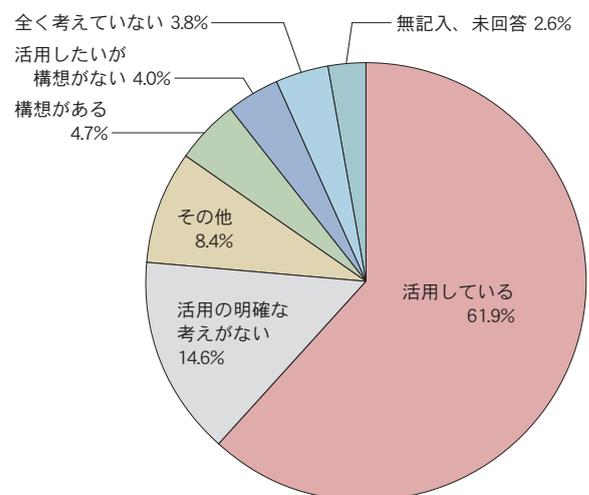
万田坑では、万田坑ファン倶楽部のメンバー（13名）が約1時間かけて施設内を無料でガイドしている。万田坑が国指定重要文化財へ登録されたときに結成され、同施設の価値を観光客にわかりやすく紹介する。

域とそれ以外の地域との間に資産の保全や観光客の集中度合いに差ができる“地域格差”の問題が生じたり、観光客の増加により構成資産の維持が難しくなるなどの弊害も指摘されている。加えて、産業遺産は構成資産に稼動中の工場などが含まれるため、修繕や改築などを自由に行えなくなることを嫌う企業側が、国の文化財指定に難色を示すことが多い。

経済産業省が同省認定の近代化産業遺産所有者等を対象に調査した「近代化産業遺産活用アンケート」（平成21年12月実施、対象896遺産）によれば、認定された近代化産業遺産としての活用状況は、「活用している」が61.9%と6割を超える。一方で、「活用に明確な考えがない」（14.6%）、「全く考えていない」（3.8%）が約2割を占めており、生産活動への支障を懸念する資産所有者も存在していることがわかる（図表5）。

このような中、稼動中の産業遺産については、今年5月に政府が文化財保護法以外での保護スキームについて閣議決定した。このため、新日鉄八幡製鉄所などが含まれる九州・山口の遺産群と、構成資産候補のほとんどがJR九州の資産である肥薩線には追い風となっている。

図表5 近代化産業遺産の活用状況



資料：経済産業省「近代化産業遺産活用アンケート」
備考：近代化産業遺産（1115件）のうち、有効回答896遺産が対象

5. おわりに

～身近にある産業遺産の保全と活用で実現する地域活性化～

世界遺産を目指す過程では、地域に存在する資産のストーリー性を明らかにするため、地道かつ大変な労力が費やされる。しかしながら、ユネスコによる登録のハードルは年々高まりつつあり、国内においても暫定リスト入りの競争は厳しさを増している。このような中で、世界遺産を目指す意義は、これらの努力が地域の資産と世界との関係性の再発見となり、地域に住む人々が過去からの遺産を次世代に引き継ぐきっかけになることであると思われる。特に、身近にありすぎて見過ごしがちな産業遺産にとって、世界遺産に向けた取り組みこそが必要とされるのではなかろうか。

また、世界遺産の効果として最も期待が大きいものは、観光客の増加が挙げられる。世界遺産を目指す意義を踏まえた観光の推進は、地域の活性化のみならず、構成資産を維持管理していくための好循環を生み出すだろう。

さらに、県内にはここまで紹介した世界遺産を目指す産業遺産以外にも文化的な価値を有する多数の資産が点在する（図表6）。身近に数多く存在する産業遺産を組み合わせたストーリーづくりは、国内外の観光客の細分化された旅行ニーズに対応し、熊本の新たな魅力を生み出すに違いない。

図表6 熊本県内の主な近代以降の産業遺産

産業遺産名	竣工年等	内 容
富重写真所 (熊本市)	明治2年	日本最古の現役写真館といわれる。西南戦争で消失する以前の熊本城をはじめ、明治の熊本の近代化の姿を克明に撮影し、記録している。平成18年に国指定登録文化財。
大築島 (八代市)	明治22年	八代海に浮かぶセメントの原料となる石灰石からなる小島。八代での九州初のセメント工場開業に合わせ採掘が開始され平成5年まで続く。その結果、標高100メートルあった山はほとんど跡形もなくなり、類例をみない産業遺産。
熊本学園大学産業資料館 (熊本市)	明治27年	旧熊本紡績電気室。平成14年月星化成熊本工場として最後を迎え、現在は熊本学園大学に移設されて、同大学の産業資料館として活用されている。平成16年に解体された旧日本セメント八代工場に使われた古い工作機械も展示されている。
烏帽子坑 (天草市)	明治30年	天草市牛深町の下須島に残る岩礁に残る採炭跡。天草下島の西半分が存在する、天草炭田と呼ばれる石炭層の採炭のため建造された。海中から突き出たような坑口のアーチが珍しい。
郡築三番町樋門 (八代市)	明治33年	石とレンガを巧みに組み合わせた堅固な10連のレンガ樋門は、デザインと機能が見事に一致した近代的建造物。昭和39年の八代港干拓造成により補助樋門となったが、現存する石造りの樋門として国内最大級を誇り、平成16年国指定重要文化財。
玉名干拓遺産 (玉名市)	明治33年	玉名市横島町の田園地帯にあり、約5.3キロにわたり石積みが続く。横島町は小さな島であったが、江戸時代からの干拓事業で干拓地に生まれ変わった。大規模な干拓堤防遺産が残るのは全国でここだけで、「玉名の万里の長城」ともいえる堤防跡。
熊本大学工学部研究資料館 (熊本市)	明治39年	熊本高等工業学校が第五高等学校から独立した際にできた機械実験工場。レンガ造り平屋建て、壁は赤レンガが用いられている。当時の工作機械が磨き上げられ動態保存されているところは他にはないため貴重。平成6年国指定重要文化財。
八千代座 (山鹿市)	明治44年	地元の商工業者が30円の株を募って作り上げた、江戸時代の風情が残り明治末期の浪漫が漂う芝居小屋。優雅な客席空間、天井広告や真鍮のシャンデリア、赤い提灯列も圧巻の国指定重要文化財。
黒川、白川発電所 (南阿蘇村)	大正3年	JR豊肥線立野駅から約500メートル離れた白川を挟んで県内の本格的な水力発電所の第一号(熊本電気黒川第一発電所)、二号(日本窒素肥料白川発電所)として建造。
旧第一銀行熊本支店 (熊本市)	大正8年	唐人町通りにある鉄筋コンクリートとレンガを組み合わせた地上2階、地下1階の建物。平成9年に取り壊しの危機にあったが、空調機器メーカーが「ピーエスオランジュリ」として再生。平成10年登録有形文化財。
水道記念館 (熊本市)	大正13年	熊本市の水道事業の発祥の地である八景水谷にある赤レンガの建物。昭和49年に水道記念館となり、平成9年に登録有形文化財に指定。八景水谷の地下水を取水源とし立田山に配水池を設けて通水していた。
第一白川橋梁 (南阿蘇村)	昭和2年	旧国鉄初の鋼製アーチ橋。水面からの高さは日本一を誇る。宮崎県延岡市につながる九州横断鉄道線の一部となる予定であったが、昭和50年の高森トンネル工事の大量出水で計画は断念。なお、同トンネルは高森湧水公園として観光客を集める。
熊本シルク関連施設 (和木町他)	明治～ 昭和	熊本は明治から昭和にかけて西日本最大の生糸生産地として名を馳せた。旧城北製糸場など良好な状態で機械が保存されている。世界遺産登録の推薦の群馬県の富岡製糸場に対し、「西の熊本シルク」として可能性を秘める。

資料：西日本新聞「産業遺産を歩く」平成21年3月18日～9月9日連載（熊本学園大学教授 幸田亮一氏執筆）
弦書房「九州遺産 近現代遺産編101」等に基づき、当研究所作成